

ホリエモンに送る手紙

仮釈放報道を見て

2006年4月29日

富沢木実

2006年1月の終わりに、デジタルメディア研究所の亀田さんから、「オンブック」(誰でもウェブから無料で出版できる <http://www.onbook.jp/>)を利用して、「ホリエモンに送る手紙」を出したので、10日以内に原稿を出しませんかという打診がきた。いろいろな世代や職業の人に依頼しているらしい。マスメディアでは報道されない別の視点を提供したいのだという。当初、何が書けるか迷ったけれども、考えているうちに次のような考えがまとまったので、原稿(手紙)を作成して送った。

+++++

ホリエモンに送る手紙

2006年2月10日

富沢木実

はじめにお手紙差し上げます。

私は、アメリカの「シリコンアレー」が盛り上がり始めた頃にたまたまニューヨークに行き、若者たちがインターネットを使ったさまざまなビジネスに挑戦している熱気に触れました。それまでアメリカのベンチャーというと「シリコンバレー」といわれ、なにやら技術めいていたり、スタンフォード大学発などと言うので難しそうで、私とは違う世界のことと思っていました。しかし、シリコンアレーは、いわゆる技術志向ではなく、インターネットという新しい道具を使って、これまでの業界に対抗、あるいは、これまでとは違うビジネスを起こすというものだったので、大変身近に感じました。

そして、東京に戻り、その内容を報告するとともに、「日本のシリコンアレーはどこだ」というような問題意識を持ちました。そうしましたら、知人が渋谷界隈に、同じような集積を作ろうという動きがあると教えてくれ、「ビットバレー」が動き始めた最初の頃から覗きみてきました。多くのネットベンチャーにお目にかかったのですが、残念ながら、堀江さんと三木谷さんを訪問す

っ直ぐに社会の矛盾を捉え、自らの上昇志向のためではなく、「大儀」に生きられる人々なのだろうと思います。私自身は、古い時代の精神構造なので、社会起業家と同じ目線に立てないのですが、若いホリエモンが私と同じ時代のニオイがするのに驚きます。

でも、私は、余りきれいな世界は好きではありません。男の子が母原病のせいで、皆清潔で、線が細くなっているのがとても残念です。母親としての自分は、息子に清く正しくを望んでしましますが、女性としての自分は、清濁併せ飲める頼もしい男性に惹かれます。こそこそと法律の抜け穴を探して金儲けをするのはさもしいと思いますが、「大儀」のために、現行の法律をもっともしないような本物の起業家が現れて欲しいものです。

堀江さんは、スピードに乗った経営ができ、新しい道具を自分の物にするのに長けているのだろうと思います。「古い上昇志向のやり方」で若いうちに挫折できたのはよかったのではないのでしょうか。出獄して、同じ精神構造でやり直すのではなく、上昇志向を捨て、まっすぐに社会を見据えて新しい自分の場所を探してもらいたいものです。あなたなら、きっと本物の起業家になってくれるのではないのでしょうか。

+++++

仮釈放報道を見て

2006年4月29日

ホリエモンが仮釈放されるという。「手紙」を書いたこともあって、関心を持ってテレビのニュースを見た。

実は、無知といわれればそれまでだが、ちょっと「ショック」だった。

というのは、上記「手紙」を書いた時には、ホリエモンがこんなに早く娑婆に出てくるとは思ってもみなかったからだ。少なくとも1年くらいは臭い飯を食っているのだと勝手に想像していた。堤義明氏は、容疑を認めて1ヶ月も経たないうちに1億円で保釈されている。ホリエモンは容疑を認めなかったという点はあるが、94日と約3ヶ月刑務所に居たのだから長い方なのかもしれない。

ホリエモンは「自分は生き急いだのかな。拘置所生活はこれまでの人生をゆっくり振り返る機会になった」と話したというが、3ヶ月くらいでは、精神構造を変えることはできないのではないだろうか。というのは、私は、一昨年2ヶ月くらい入院し、内心人生観が変わるかと期待していたのだけれどほとんどだめだったからだ。

しかも、堤さんがすっかりマスコミから相手にされていないのとは対照的に、まだまだホリエモンを巡る報道は加熱している。それは、多かれ少なかれ、世間が彼の若さとパワーに期待して

いるからだと思うけれども、これは、ホリエモン自身にとっては、せっかくの新しい出発のチャンスを奪ってしまうことになりかねない。

保釈中であっても、美味しいものは食べられるし、ヒルズに美女を呼び込むことだって出来るだろう。まだまだ大株主でもあるので社会的にも注目をされ続ける。世間から見向きもされなくなり、本当に寂しい思いを少なくとも1年くらいは経験することが彼にとって大きな栄養になるはずだったのだが、残念だ。

一方、自分も含め、「ホリエモンへの手紙」を書いた人々の精神構造が気になり始めた。実はその後、ウェブでなく紙媒体で出すことになったという知らせがきた。取次ぎを一社に絞ってどこまで反響が出るかの実験をやってみるらしい。そして、4月20日に発売され、手元に一冊届いた。

パラパラと読んでみると、いろいろな立場からの手紙が整理されずに集められているので、ちょっと疲れる。気になるのは、亀田さんが編集後記で書いているように、皆一様に、ホリエモンに対してやさしいことだ。皆、再起を願っている。

しかし、今となってみると、私も含め、手紙を書いた人々は、漠然とホリエモンがしばらく塀のなかにいる（少なくとも社会的に抹殺された）と思っていたのではないだろうか。だから、ある意味、高みにたって「やさしかった」のかもしれない。彼の能力を認める一方、心のどこかにやっかみもあって、つかまったので「ざまあみろ」と内心思い、でも「教養ある人々」なので、やさしく振舞ったのではないだろうか。

もちろん、自分自身、手紙を書いた折には、上記のようなことは思ってもいなかったのだが、予想外に早い「復帰」に「ショック」を感じた自分を見直すと、なんだかそんな気がする。「本当に寂しい思いをすることがホリエモンにとって望ましかったのに」と書いたことは本心なのだが、これも深層心理は「やっかみ」なのかもしれない。